The Remains of the Day における疑似家族への思慕

平野牧子

1. はじめに

カズオ・イシグロの長編第三作 *The Remains of the Day* (1989、以下 *Remains*) の語り手 Stevens とかつての同僚 Miss Kenton の関係は、「恋愛」という文脈で論じられることが多く、“unreliable narrator”として知られる Stevens は恋愛感情を抑制していると解釈されてきた。しかし、Stevens の孤独な生い立ちや「偉大な執事」を目指す姿勢、Miss Kenton に対する頑なな態度、そして“Motherly love by its nature is unconditional”(Fromm 32) という定義などを深慮すると、恋愛という枠に縛られない彼らの関係性が浮かび上がる。

本論では、二人の関係性を彼の父親を含めた「疑似家族」の視点から捉えなおし、両者はともに家族的な愛情を求めていたが、Stevens が自分を無償の愛で支えてくれる母的な存在を求め、Miss Kenton と男女の関係になることを忌避する一方、Miss Kenton は本物の家族を切望し「疑似家族」を手放したことを提示する。

2. 「疑似家族」としての三人の関係性

三人の関係性には、肉親との縁が薄い彼らの孤独が関わっていると考えられる。Stevens が母親について一切語らない事実は、語るべき母との思い出を持たない彼の孤独を示唆する。兄については、その戦死を嘆き続けた父親、そして兄を犬死させた将校にさえ私情を挟まず仕えた父親の偉大さを語るのみで、この偏った語りからも家族関係の希薄さや愛情を注がれなかった彼の孤独が伺える。そして副執事として屋敷に迎えた父親との関係は依然として硬直しており、執事としての父親を崇拝する Stevens は、その老いによる衰えやミスに目を向けない。このような Stevens に代わり父親の体調や仕事ぶりに目配りをし、その最期を看取るのが Miss Kenton である。Stevens は彼女の家族的なケアによって職務に専念でき、そして身内は叔母だけという Miss Kenton は、彼の父親をケアすることで家族的なつながりを感じたのではないか。

3. Miss Kenton に支えられる Stevens

父親を過度に理想化する Stevens は、自身に過剰な負荷をかけてしまい (Shaffer and Ishiguro 8-9)、重要な国際会議がダーリントン・ホールで開催される中倒れた父親の付き添いよりも主人への奉仕を優先させる。Stacy が“Stevens is much more comfortable with the ritualistic structures demanded by his professional role”(97) と指摘し、父親の危篤を聞いた自身の様子を Stevens が“I must have looked a little confused”(*Remains* 108) と語るように、彼は規範に則った対応には長けているが、家族に関わるような私的な事態に適切に対応することができない。そのような Stevens と、彼を支える Miss Kenton の「疑似家族」としての関係性を象徴するのが、重篤な父親のケアを巡る二人の言動である。Miss Kenton は彼に“You had better come and see him”、“You must come now, Mr Stevens, or else you may deeply regret it later”(*Remains* 108)と、母親のそれを想起させる強い口調で指示する。このように明確な助言を与える彼女がそばにいたからこそ、Stevens はまだ息のある父親に会えたのである。

4. Stevens の父親亡き後の二人の関係

Stevens 親子と Miss Kenton は、彼女のケアによって家族のようにつながっていたが、父親が亡くなったことで二人の関係性は変化する。Stevens はこれまで通りの関係を維持しようとするが、Miss Kenton は本物の家族を求め二人の距離を縮めようとする。この変化を象徴するのが、Stevens が“turning point”と呼ぶ出来事のひとつ、恋愛小説をめぐる一件である。Stevens が読書をしている食器室へ無断で入ってきた Miss Kenton は、彼が読んでいる本が“something rather racy”(*Remains* 175)であることを期待しながら彼に迫るが、Stevens は彼女が接近するほどに後ずさり必死に顔を背ける。結局 Stevens から強引に取り上げた本は、彼女が期待したほど際どいものではなく、Miss Kenton はこの件で Stevens の性的欲求の低さを感じたのではないか。

二人のすれ違いは、一日の締めくくりとして二人が続けてきた「ココア会議」にも伺える。ある「ココア会議」で、彼女の外出予定を確認する Stevens に Miss Kenton は交際相手のことをしきりに話すが、Stevens が関心を示さないため、彼女は“Here you are, after all, at the top of your profession, every aspect of your domain well under control. I really cannot imagine what more you might wish for in life”(*Remains* 182)と言う。しかし Stevens は Miss Kenton に言及しないばかりか、ダーリントン卿への忠誠を語り、彼がケアするのは主人だけであることを宣言する。この時 Miss Kenton は、Stevens からのケアは望むべくもないことを悟ったのではないだろうか。

その後、Miss Kenton が唯一の肉親である叔母を失った際にも、Stevens は彼女にケアを表すことができなかった。期待をことごとく裏切られ、Stevens と本当の家族になることを諦めた Miss Kenton は、別の男性と結婚するために職を辞し、ダーリントン・ホールにおける「疑似家族」の関係は終わりを迎える。

「ケア」については、米国の心理学者キャロル・ギリガンが「ケアの倫理」の重要性を説き (28-29)、小川公代は、女性たちも「ケア」を必要としていることへの社会の無理解を指摘している (11)。Miss Kenton にケアを示さない Stevens は、このような社会の象徴のようにも見える。

5. 再び孤独を生きる Stevens

戦後は執事仲間と議論する機会もなく、初老の Stevens には職務上のミスも出始めた。そのような Stevens が Miss Kenton の手紙に復職を望む気配を感じ取り、再び彼女に支えられ執事として人生を全うする自身の姿を思い描き、期待に胸躍らせたことは想像に難くない。

しかし再会して知るのは、彼女のケアは家族に向けられており、Miss Kenton を取り戻すことはできないという事実であった。さらに再会の前日に、各“turning point”で自分の対応が違っていればと考えていた Stevens は、彼女から“And you get to thinking about a different life, a better life you might have had. For instance, I get to thinking about a life I might have had with you, Mr Stevens”(*Remains* 251) と告白され、後悔と悲しみをさらに強くしたと思われる。したがって、Stevens の胸が張り裂けたのは、恋を失ったためというよりも、過去の振る舞いへの後悔、そして無償の愛でケアしてくれることを期待していた Miss Kenton を再び失ったための慟哭だったのではないだろうか。

6. 結語

本論では、Stevens と Miss Kenton の関係性を、彼の父親を含めた「疑似家族」の視点から再検討し、恋愛という範疇に収まらない思慕の形を提示した。「偉大な執事」を目指す Stevens は、Miss Kenton の家族的なケアに支えられ職務に邁進した。一方、切望した彼からのケアを諦めた彼女は家庭を築くために屋敷を去り、「疑似家族」の関係に終止符を打ったのである。イシグロが描く家族の形は複雑であり、例えば *A Pale View of Hills* の語り手は家族に罪悪感を抱き、*Never Let Me Go* のクローンたちは兄弟姉妹のように暮らす「疑似家族」のようでもある。このような特徴を踏まえ、本作でイシグロが描くのは、伝統的な枠組みには収まらない家族への思慕であり、Stevens は Miss Kenton に母のような支えを求めているという解釈にも一定の妥当性があると考える。

引用文献

Fromm, Erich. *The Art of Loving*. Thorsons, 1995.

Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. Faber & Faber, 2005.

Shaffer, Brian W., and Kazuo Ishiguro. “An Interview with Kazuo Ishiguro.” *Contemporary Literature*, vol. 42, no. 1, U. of Wisconsin P, Spring, 2001, pp.1-14.

Stacy, Ivan. *The Complicit Text: Failures of Witnessing in Postwar Fiction*. Lexington Books, 2021.

小川公代『世界文学をケアで読み解く』朝日新聞出版、2023 年。

ギリガン, キャロル『抵抗への参加―フェミニストのケアの倫理』小西真理子、田中壮泰、小田切建太郎訳、晃洋書房、2023 年。